外国人の子どもの保育に関する調査

中　川　美　子

はじめに

筆者は、日系ブラジル人の園児を多数保育している保育園の調査を続けており、その様子を報告する[1,2]中で通訳の果たす役割が大きいことを指摘した。今回は、通訳が配置されている園を中心に調査をし、その利点を追及した。さらに、東海地方以外の川崎市や横浜市などの外国人の園児を多く保育している園についても調査したので、合わせて報告する。

Ⅰ　調査方法

前回調査した園の中で、通訳が配置されていた園を対象として通訳が果たす役割について、通訳及び園長から面接による調査をした。通訳には、「派遣による通訳との違い」、「通訳をしていてよかったと思うこと」、「通訳をしていて困ったこと」、「保育についての工夫」等を聞き、その結果を１に記した。さらに川崎市、横浜市、太田市（群馬県）、浜松市、八尾市（大阪府）の外国人の園児が多い保育園について保育の状況を調査した。調査期間は、2004年１月から2005年７月で１回当たりの調査時間はおよそ２時間である。

Ⅱ　調査結果

1　通訳者がいる保育園の調査

園長と記した箇所以外は通訳からの聞き取りによる。

①　U保育園（川崎市・私立）

＊調査日：2004年10月（2004年１月に副園長に面接し、その結果を下記の２①に記した。今回通訳に面接するため、再度来訪した。）

＊通訳の状況：U保育園の全園児数は68名で、その内35%が外国人であり、

韓国や朝鮮人の園児が多い。最近はブラジルやペルー人の園児も在園している。

＊園の外国語への対応：中国語とタガログ語は、保護者の中に通訳のできる人がいる。ポルトガル語とスペイン語は、通訳を雇用している。韓国語は韓国籍の職員がいる。

＊通訳の状況：通訳は１名で、来日して９年目になる。子どもが４人いる女性で一番上の子はペルーに住んでいる。アルゼンチン出身でスペイン語が母国語であるが、ポルトガル語も自分で勉強した。臨時職員。

＊通訳の勤務状況・保育担当など：副担任として２歳児クラスを担当している。勤務時間は午前８時半から午後５時（月曜日～金曜日）までである。園だよりや給食のおたよりをスペイン語とポルトガル語に翻訳する。

＊派遣通訳との違い：子どもの体の具合や家で食べた物など子どものこと全体がとらえられる。3, 4, 5歳児は家からおかずだけ持ってくることになっているが、そのことが正しく理解されなくて、最初は菓子パンを持って来たりするので、そのような時母親にきちんと説明できる。

＊通訳をしていてよかったと思うこと：子どもの成長の様子がわかること。

＊通訳をしていて困ったこと:子どもは日本語を覚えるが、親は日本語がなかなか覚わらない。小学校、中学校、高校の配付物には振り仮名がないので、親が困っている。

＊保育における工夫：日本語の絵本をスペイン語とポルトガル語に翻訳している。運動会の時にミニハウスを作り、その家に日本語、韓国語、中国語、タガログ語、スペイン語、ポルトガル語で保育園の名前を書いた。以前ボリビアの子が入園した時は、担任ではなかったが１週間一緒に暮らした。

②Ｈ保育園（知多郡東浦町・公立）

＊調査日：2004年10月

＊通訳の状況：Ｈ保育園の全園児数は180名で、その内54名（30%）が外国人でありブラジル人が50名、ボリビア人、ペルー人、パキスタン人、チリ人が各１名である。Ｈ保育園には、３名の日系ブラジル人の通訳がいる。その中で、

比較的日本語のできるＳさんに聞き取り調査を行った。通訳は、３名とも嘱託で、園には加配の形で配属されている。Ｓさんの父母は日本人でブラジルに住んでおり、兄弟３人が共に来日した。来日の動機は従兄弟から誘いがあったため。来日して14年目になり、Ｈ保育園に勤務しているのは９年前からである。子どもが好きで、保育士の資格はないがブラジルで家庭教師をしていたことがある。17歳と15歳の子がいる。17歳の子は現在はブラジルに住んでいるが、長い間日本で暮らしていたのでブラジルでも日本語で生活して、ポルトガル語がわからない。

＊通訳の勤務状況・保育担当：通訳の仕事がほとんどで、クラスは担当していないが補助で年長組へ入ることもある。嘱託で、月曜日から金曜日まで午前９時から午後５時半までの勤務。週２日、午前中ブラジル人の園児が多い別の保育園へ通訳として行っている。

＊派遣通訳との違い（園長）：Ｓさんは、保護者から頼りにされている。入園や子どもの病気、団地への申し込み、小学校への入学の時などお母さん方はＳさんにいろいろ聞いている。例えば帽子を購入してもかぶってきなさいと書いてないので、帽子をかぶって学校へ行かなかったりする。

＊通訳をしていてよかったと思うこと（以下はＳさん）：子ども達がかわいい。通訳の経験で、相手の言いたいことをよく聞くなどいい点を習って自分の子育てができた。

＊通訳をしていて困ったこと：最初の頃子どもの名前がわからなかったので、ストレスで髪が白くなってしまった。

＊保育における工夫：ブラジルの絵本（もらったもの）を日本語に翻訳したり、日本語の絵本をポルトガル語に翻訳する。縄跳びの時にブラジルの歌を歌う。ハンカチ落としをブラジルの歌を歌いながらする。日本語の手遊びの中にポルトガル語を取り入れる。別の通訳の方が門の扉に絵を描いた。

＊町や園への要望：ブラジルの絵本がほしい。

＊その他（園長）：近くの小学校や中学校にも通訳の人が配置されている。今年の外国人の卒園生は18名だったが、その内16名は地区の小学校へ進み、２名がブラジルへ帰国した。

③　Ｐ保育園（四日市市・公立）

＊調査日：2004年12月

＊通訳の状況：Ｐ保育園の全園児数は106名で、その内24％が外国人である。外国人は、ブラジル人が20名、ペルー人が５名である。１名の通訳と外国人のための加配の保育士が１名いる。通訳は来日して15年になる日系ブラジル人で、Ｐ保育園に勤務して４年半になる。看護師の資格があり小児科の看護学もブラジルで学んだが、ここでは小児看護の仕事はしていない。臨時職員である。

＊通訳の勤務状況・保育担当：勤務時間は、午前８時半から午後５時15分までで、週２日は午前９時半から午後６時15分まで勤務して、父母の送迎に対応している。クラスの担任はなく、全体の子どもをみる。

＊派遣通訳との違い：派遣の場合は、園の状況や相手の気持ちがわからない。翻訳はできても、通訳の仕事はむずかしい。子ども達の気持ちがわかる。

＊通訳をしていてよかったと思うこと：自分が成長した。もっと早く通訳として就職していたら、自分の子育てにも役立たせることができた。四日市市は子どもを大事にしている。

＊通訳をしていて、困ったこと：忙しい。家にも仕事が持ち込みになる。物相手ではないので（責任がある）。子どもの出入りが多く、集中して仕事ができにくい。自分の時間が少ない。

＊保育についての工夫：ポルトガル語に翻訳した絵本（資料１）の貸出カードを作製した。貸出記録を取り、週間毎の集計もする。年間の個人別貸出状況も集計している。Ｑ保育園と月１回外国人についての会議を開いている。

＊母国の文化などの紹介：カルタ・ブラジルの手遊び・ブラジルのケンパなどを保育に取り入れている。

＊市や園への要望：翻訳者が別にほしい。園だよりはともかく、クラスだよりは担任の気持ちが入るので、担任の思いを翻訳できるとよい。

＊その他：Ｐ保育園とＱ保育園は月に１回、園長・主任・通訳・加配の保育士が集まり外国人の保育に関する連絡会議を開いたり、外国人の保育に関する活動報告書を作製している。活動報告書によると通訳を配置した結果、「外国

籍園児の思いや訴えがわかるようになった。」、「職員やまわりのいうことも、外国籍の子どもに伝えやすくなった。」、「通訳を常勤雇用したことで、保護者の安心感が非常に高まった。」などとしている。

④　Q保育園（四日市市・公立）

＊調査日：2004年12月

＊通訳の状況：Q保育園の全園児数は98名で、その内31％が外国人である。外国人はブラジル人が26名、ペルー人３名、ボリビア人１名である。１名の通訳と加配の保育士が１名いる。通訳は日系ブラジル人で、来日して４年になるが、その前にも一度日本に滞在していたことがある。ブラジルでは、事務職をしていた。子どもが２人いるが、子どもは日本語を話しポルトガル語が話せないので、ブラジルへ一時帰国した時学校で外人と言われた。祖父母が日本から毎日電話をしてくれた。２回目の来日の時、下の子は「ここは自分の国でないので、ブラジルへ帰りたい。」と言った。仕事に一生懸命で少し子育ての面でよくなかったと思うこともある。臨時職員である。

＊通訳の勤務状況・保育担当：クラス担任はない。勤務時間は、上記のＰ保育園と同じである。園だより、クラスだより、連絡ノートの翻訳をする。外国人がいる他の保育園の翻訳や入園案内をＱ保育園の通訳と２人でしている。

＊派遣通訳との違い：派遣通訳の時は親に通じていたと思っていても、実際は通じていなかった。常勤になってから、母親が自分の休憩時間に電話してくるようになった。母親の気持ちが伝わってくる。去年４月から役所に国際交流課が設置され、今年（2004年）10月からは国際共生サロンもできて、親の悩みを聞いたり対話ができるようになった。それ以前は、生活面で医者の返事がわからないので病院に付き添っていくこともあった。

＊通訳をしていてよかったと思うこと：通訳がいないと言葉が思うように通じないのでこの仕事を愛している（やりがいがある）。子ども達のよくない会話もすぐキャッチできるので、良くない言葉が広がらない。通訳がいない時は外国人が固まったこともあったが、今はそのようなことはない。保育園ではポルトガル語は自由に話してよい。

＊通訳をしていて困ったこと：もっと日本語が上手だとよい。日本語が不十分なので伝えるのに困る時がある。

＊保育についての工夫：絵本や遊びは日本のものを主にしているが、衛星放送でブラジルの手遊びを紹介しているので、ブラジルの手遊びも保育に取り入れている。園児が「寒くない」というべき時に「寒いじゃない」などと言っている時には正しい言葉を教える。

⑤X保育園（名古屋市・公立）

＊調査日：2005年6月

＊通訳の状況：X保育園の全園児数は64名で、その内70%が外国人である。国籍はブラジル人が多い。通訳は1名。日系ブラジル人で専門は機械工学である。ブラジルで日本語学校へ通い日本語を習得した。日本で機械工学の仕事をしていたが、2003年10月からX保育園で通訳として勤務している。

＊通訳の勤務状況・保育担当：週20時間の加配の枠を使用している。臨時職員。勤務時間は月、木曜日は午前9時半から午後1時半まで、火、金曜日は午前9時半から午後3時半までで、水、土曜日は休みである。連絡帳、園だより、クラスだより、お知らせの翻訳もする。クラスの担任はしていないが、給食の時に順番にクラスに入る。

＊派遣通訳との違い（園長）：通訳がいなくては園の仕事が回っていかない。5歳児クラスは日本人はゼロなので、日本語で出す文章が必要ない。通訳者が常駐していると園としても気安くいろいろなことが頼める。

＊保育をしていてよかったと思うこと（以下通訳）：子どもの成長ぶりが年齢毎にみられて楽しい。子どもと一緒に話したり、遊んだりしてとても楽しい。こういう仕事があったのかと思った程すばらしい仕事。

＊通訳をしていて困ったこと：通訳の仕事は感情を入れたらいけないので、自分の気持ちを現わしてはいけないことがむずかしい。翻訳をする時は、直訳できないこともある。例えば「よろしくお願いします。」に相当するポルトガル語はない。

＊保育についての工夫：保育の一日の流れを壁に張ってお母さんにわかるよ

うにしている。夏祭りに若手の保育者がリードして松健サンバを取り入れる。

＊市や園への要望：待遇面を改善してほしい。

＊その他（園長）：通訳の方が親の送迎の時にいてもらえると助かる。ポルトガル語を話せる保育士は捜しにくいので、通訳に頼る面がある。途中入所の子は来日して間もない子が多い。年長の子が新しく入所した子の面倒をよくみる。X保育園がある区は病院に通訳ボランティアがいる。卒園生は、ほとんど地区のT小学校へ進む。今年（2005年）は7名がT小学校へ進み、1名がブラジル人学校へ進んだ。T小学校に今年一人ポルトガル語を話せる先生が赴任した。

⑥D保育園（豊田市・私立）

＊調査日：2005年7月

＊通訳の状況：D保育園の全園児数は152名で、その内72%が外国人であり日系ブラジル人多い。外国人が増加したので、通訳を5名に増やした。通訳は4名が日系ブラジル人で、1名は日本人である。通訳の2名（HさんとTさん）が愛知県立大学のスペイン学科・夜間主コースの学生ということで面接はHさんとTさんに行った。Hさんは、日本人でD保育園のある団地内に住んでいて、D保育園の卒園生でもある。卒業後も引き続きこの園で働くことを希望している。Tさんは、日系ブラジル人で中学生の時に来日した。来日当時は、日本語がわからなかったので、学校で苦労したこともあった。S短大の国際文化学科を卒業してから、愛知県立大学に編入学した。「ブラジルでは、ブラジルで生まれたらブラジル人として受け入れられるが、日本では日本で生まれても外人として扱われる。」と感じている。

＊通訳の勤務状況・保育担当：通訳5名はいずれも臨時職員で、その内4名は正規職員と同じ8時間勤務、1名は5時間勤務である。HさんとTさんの勤務時間は、午前7時半から午後4時までである。

＊派遣通訳との違い：常勤でやっていると保育のパターン（流れ）がわかる。単発とは異なり継続している。

＊通訳をしていてよかったと思うこと：（Hさん）子どもと関わることができ

ること。

＊通訳をしていて困ったこと：（Hさん）：保育士との関わりがむずかしい。通訳者は保護者と保育士との中間にいるが、子どもはすぐ通訳者の所へ来てしまうので、担任の保育士との関係がむずかしい。それから、日本人にとっては当たり前のことでも、ブラジル人には違うことがある。例えば、母が再婚したら日本では新しい父の苗字になるが、ブラジルでは母が再婚しても、すっかり新しい父の名前になるのではなく、どんどん名前が加わっていく。

＊保育についての工夫：絵本の翻訳など。（筆者注：D保育園には、ポルトガル語の絵本が多数あり、年長児は家へ貸し出してもらえる[2]。）

＊市や園への要望：待遇の面では恵まれていると思うので、特に要望はない。二人共、卒業後もD保育園で働きたい。

2　川崎市・太田市・横浜市等における調査

川崎市・横浜市・太田市・浜松市・八尾市の外国人が多い保育園でも、保育の状況について前回の報告[2]と同様の調査を2004年に行ったので、合わせて報告する。聞きとり調査は園長に行った。

①U保育園（川崎市・私立）

＊調査日：2004年1月

＊U保育園の特徴：多文化共生保育に熱心に取り組んでいて、その様子は2002年に製作された映画『ヘンニムの輝き』（資料2）で知ることができる。映画は、U保育園の1年間の保育の記録で、違う民族が一緒に生きることの素晴らしさを教えてくれた子ども達、子どもの夢を守るために闘う大人達を描いており、「ここに戦争はありません　ここに差別はありません　世界の人が手をつなぐ秘密がここにあるのです」とうたっている。「温室といわれる保育園。冷たい社会。子ども達が進んでいく社会を変えたいという思いと、痛感するその難しさ」（資料2より）。

＊副園長の話：園児の親に生活の厳しさがある。保育所が親の生活を支える必要がある。子どもが風邪をひいても、薬局で薬を買ってきて済ませてしま

い、子どもが重症になってしまう時もある。連絡ノートは6か国語のノートを作っている。保育園は温室ともいわれているが、温室で良いと思う。温室が広がれば良い。競争社会といっても走りたくても走れない人もいる。卒園した園児のO.B.会がある。

＊園の行事などで配慮していること：民族衣装を大事にしている。民族衣装がきれいだなというとらえかたをしている。「きれいだね。楽しいね。似ているね。でもちょっと違うね。」と話している。夏の合宿では魚をさばくことを体験させた。肉は園児を連れて屠殺場の見学をした。実際の物を見せる保育を心掛けている。

＊外国人の園児が多いことで保育上むずかしいことや、困難なこと：親の生活の厳しさと子どもの医療が問題である。

②V保育園（横浜市・公立）

＊調査日：2004年1月

＊全園児数と外国籍の園児数：全園児数は72名で、その内56名（78%）が外国人で、内訳はベトナム人33名、中国人17名、ペルー人3名、タイ人1名、バングラディシュ人1名である。外国人は、平成10年度は20%であったが平成11年度から急増した。ベトナム戦争後にベトナムから来た人達の2世が親で、母親はベトナム人なので日本語が話せない。

＊通訳の配置・派遣、保育士の加配：週に1日、区役所から通訳が派遣される。通訳者は、父母との懇談の時の通訳や翻訳を主に担当するが、時には入園したばかりの子に対する援助など子どもの中に入ることもある。

＊保育の面での工夫：卒園後は、園児が地区の小学校へ進むので、地区の小学校と連携を持つようにしている。年に4回位（お楽しみ会、正月、ドッジボール大会、入学前）小学校と交流会を持つ。絵本を母国語で読み聞かせたり、歌（「きらきらぼし」等）を英語・中国語・ベトナム語でも歌う。

＊食事について：給食のことではあまり困っていない。ベトナムのやり方では、離乳食の概念があまりなく、牛乳からいきなり普通食に近いものになる。

③W保育園（横浜市・公立）

＊調査日：2004年１月

＊全園児数と外国籍の園児数：全園児数は126名で、その内24名（19%）が外国人で、内訳はブラジル人11名、ボリビア人５名、ペルー人３名、その他５名。他にボリビア、アルゼンチン、ミャンマー、ネパール、フランス、ガーナの園児（各１名）は、父母のいずれかが日本人である。Ｖ保育園と異なり、W保育園にはベトナム人は在園していない。

＊通訳の配置・派遣、保育士の加配：通訳の配置や定期的な派遣はない。外国人の園児の割合が20%以上になると加配があるが、2004年度は20%を割っているので加配はない。しかし正規の職員として、ポルトガル語とスペイン語のできる保育士が１名（Ｏさん）いて、クラスの担任も持っている。他に行事の時に臨時に通訳の派遣を依頼することがある。

＊保育の面での工夫：園の目標に「いろいろな国の友達といろいろな思いを分かち合って共感しましょう」ということを掲げていて、音楽やダンスなど園児の国の文化を取り入れるようにしている。Ｏ先生がいることで、細かいことを父母に伝えられるので、保護者が「Ｏ先生に聞けば大丈夫ね」と安心する。

＊外国人の園児がいてよかったと思うこと：ブラジルの人達は家族や友人を大切にするので、その姿勢を学ぶことが出来る。

＊保育の面でむずかしいこと：家庭の様子について神経を使ったり、生活習慣の面で困ることがある。例えば、梅雨時に雨が降ると寒いという気持ちが親にあり、子どもを厚着にさせる。また、夜遅く集まる週間があり、子どもが夜寝るのが遅く、朝眠いとか元気がないなど問題があるので、ブラジルでの生活ならいいかもしれないが、小さい子を夜遅くまで起こしておくのは問題があることを個別に話をして理解を得るようにしている。

＊園の行事における配慮：園児全員の国旗に気をつけている。サッカーの試合の放映をきっかけにブラジルの文化を取り入れるようになった。

＊言葉について：上記のようにポルトガル語とスペイン語が話せる保育士がいる。園だよりは、かなを振っている。

＊その他：来日してすぐ年長組に入った園児で母親も日本語があまりわからなかった園児がいた。友達の中に入れなくて登園をいやがったので、家まで職

員が迎えに行き、母親へのフォローをすることでうまくいった例があった。ブラジルの人達は１歳の誕生日を盛大にする。フランスは母親に対して育児支援があるが、日本ではあまりないので悩むようである。

④Ｙ保育園（群馬県太田市・私立）

＊調査日：2004年３月

＊全園児数と外国籍の園児数：全園児は90名で、その内15名（17%）が外国人で、ブラジル11名、ペルー人３名、韓国人１名である。

＊通訳の配置・派遣、保育士の加配：相役所に要請すれば通訳を派遣してもらえる。しかし、父母の中のブラジル人で日本語ができる人に電話をして来てもらい通訳を頼むことが多い。

＊保育の面での工夫：特にないが、園だよりはローマ字や片かな、平がなあるいは職員が辞書を見てポルトガル語で書く。

＊外国人の園児がいてよかったと思うこと：子どもがかわいいこと。

＊保育の面でむずかしいこと：過去に、日本語が通じない父母がいて誤解を招いたことがあった。子どもがいじめられている、差別されていると誤解したが、父母の方で通訳を連れて来て誤解だとわかり解決した。子どもが熱を出しても、会社を休むと解雇されるので親が会社を休めない。生活がかかっている。

＊園の行事における配慮：特別なことはしていない。

＊言葉について：通訳や翻訳は上記のようにブラジル人の父母の中で、日本語ができる人に頼むことがある。外国人の園児の母語の保持については、親に任せている。ブラジルへ帰る予定のある人は、ブラジル人学校へ通わせるようにしている。保育園内では、日本語で話をしている。子ども達同士でも日本語で話している。家では日本語とポルトガル語の両方を使っている家庭もある。

＊その他：Ｙ保育園は外国人の子どもの保育の歴史が長いせいかとまどうこともなく保育が行われている様子であった。

⑤Ｚ保育園（浜松市・公立）

＊調査日：2004年３月

＊全園児数と外国籍の園児数：全園児は144名で、その内32名（22%）が外国人で、内訳はペルー人13名、ブラジル人９名、フィリピン人４名、中国人４名、オーストラリア人１名である。

＊通訳の配置・派遣、保育士の加配：市からの援助はない。

＊保育の面で工夫していること：子ども達に共通の言葉（日本語）をわかりやすい言葉で話すようにしている。

＊外国人の園児がいてよかったと思うこと：子どもや家族を大切にする思いに触れることができた。

＊保育の面でむずかしいこと：おたよりや園から伝えたいことが細かな部分まできちんと伝えられないこと。

＊園の行事における配慮：行事について理解しているかを親の一人一人に確認する。困っていることはないか声をかける。

＊言葉について：通訳や翻訳は日本語がわかる父母に手伝ってもらったり、ＣＳＮ（佐鳴台多文化共生ネットワーク）に援助を頼む。外国人の園児の母語の保持については、親に任せている。家ではポルトガル語が多く使われているようである。

＊食事について：初めは、日本の食事の味に慣れていないがだんだんと食べられるようになる。しょうゆと砂糖の味がダメで、甘辛い味にはなかなか慣れない。寿司ごはんや酢の物が食べられない。

その他：Ｚ保育園では、行事の時にブラジルの歌を歌ったり、日本の絵本をポルトガル語に翻訳することもなく、日本人だけの保育所と変わらない保育が行われている。外国人が多いという　４歳児クラスで、一緒に給食を食べたらとても感じのよいクラスであった。担任が精力的な方で、クラスの雰囲気がとてもよかった。しかし、クラスの子のＥ児はブラジル人であるが、日本で生まれたので自分は日本人と言っている。他にＤ．Ｖ．に会っている母親がいて、親へのケアの必要性を感じている例や母親の出産に伴い欠席が多い園児に保育料のことについて伝えたいが、日本語の細かいことを伝えることがむずかしい

などということがある。

⑥ＹＨ保育所（大阪府八尾市・公立）

＊調査日：2004年５月

＊全園児数と外国籍の園児数など:全園児数は100名で、その内19名（19%）が外国人で、内訳は中国人10名、ベトナム人９名である。

＊ＹＨ保育所の状況：雇用促進住宅が有り住居費が安いので、中国の人などが集まりやすい。多文化共生に地域が積極的で、人権ふれあいセンターがある。中国の子どもは、最初日本語が話せないが、３か月位で日常会話はできるようになる。父母の日本語能力には差があるが、漢字はわかるので読むことはできる。ベトナムの子は、日本に来た時はやはり日本語を話さない。親の日本語能力にも差があり、会社員は早く日本語を覚えるが内職をしている人はなかなか日本語を覚えられない。

＊通訳の配置・派遣、保育士の加配：通訳の派遣がある。ベトナム語の通訳は週１回、中国語の通訳は保育園から要請した時大体月１回位市から派遣される。中国語の通訳者の籍は市役所にあるが、ＫＡ保育所に常駐していてＹＮ保育所やＹＨ保育所を回っている。幼・保・小・青（学童の青少年会館の青）多文化共生キッズ交流会を年３－４回開いて、悩みや課題について話している。小学校の調査でベトナムの児童は、６割が朝食を食べてこないことや、日本語の語彙が不足していることなどが指摘されている。

＊通訳の派遣以外の市からの援助:「多文化共生保育のための対話支援カード中国語、韓国・朝鮮語」が市から配付された。多文化共生保育の研修会が年に１－２回開催される。

＊保育について工夫していること：歌「ぶんぶんぶん」などを、中国語やベトナム語でも歌ったり、歌詞の中に「おはよう」という言葉が出てきたら、それを中国語やベトナム語でも歌ったりしている。日本語の絵本「三びきのガラガラドン」、「はらぺこあおむし」などを中国語やベトナム語に翻訳してもらい、家庭に貸し出して家でお母さんと一緒に読むようにしている。誕生会でベトナムの民族衣装などを紹介している。

＊外国人の園児がいてよかったと思うこと：それぞれの国の文化の違いを受け入れることが自然にできる。ベトナムの子は手先が器用である。

＊保育の面でむずかしいこと：子どものことでは感染症が心配で、保護者のことでは交通ルールや時間を守ることについて問題を感じている。

＊園の行事における配慮：生活発表会で民族衣装を紹介する。保護者会で役員がベトナム語や中国語であいさつをしたこともあった。保育所では、母国語を使うことも自由である。以前は保育所では日本語を話すようにと思っていたが、多文化共生保育の研修を受けてからは、母国語も自由に話すようにしている。

＊言葉について：通訳・翻訳については、通訳者が市から派遣される。外国人の園児の母国語の保持については、多文化共生保育の研修を受けてから考え方が変わり、保育所でも母国語を自由に使っている。保育士が簡単な会話カードを手作りして、園児に母国語で話しかける。

＊食事について：食事のことで困ったり、特別に配慮していることはない。

Ⅲ　考察

外国人の割合と国籍については、名古屋市のＸ保育園や豊田市のＤ保育園のように外国人の割合が70％を超えている保育園もあり、中でもＸ保育園の５歳児クラスにおいては、日本人が一人もいないという状況であった。外国人の国籍もＸ保育園やＤ保育園では、日系ブラジル人が大半を占めるが、川崎市のＵ保育園では韓国人や朝鮮人が多く、八尾市のＹＨ保育所では中国人や、ベトナム人が多く、横浜市のＶ保育園とＷ保育園のように居住地域により国籍に違いがみられたりする場合もあった。

今回の調査では、前回調査した21か園の内通訳者が常駐していた５か園と川崎市のＵ保育園を通訳がいる保育園として選び面接調査を行った。通訳はＵ保育園においては、副担任としてクラスを担当していたが、他の園ではクラスは担当していなくて通訳と翻訳の仕事に専念していた。他に横浜市のＷ保育園で、ポルトガル語とスペイン語ができる保育士が正規の職員としており、この保育士はクラスを担当しているので、行事の時などには通訳の派遣を依頼して

いる場合もあった。通訳の前歴は、看護師、事務職、機械工など様々であった。通訳は、いずれの保育園でも、臨時職員や嘱託で正規の職員でないが、勤務時間は週20時間勤務のX保育園の通訳者を除き、ほとんどが正規職員と変わらなかった。

今回の調査で筆者が最も知りたかった派遣通訳との違いを通訳自身がどのようにとらえているかであるが、Q保育園の通訳の経験からもわかるように「派遣の場合には、親に通じていたと思っても実際は通じていなかったり、常勤になって初めて親から信頼されて電話による相談も受けるようになったりする。」という意見や、P保育園とQ保育園の共同の活動報告書にも、通訳が配置されて「外国簿園児の思いや訴えがわかるようになった。」とあり、また「派遣では相手の気持ちがわからない。」、「保育の流れがつかめない。」という意見があり、保育園に常駐することにより保護者からも信頼されたり、子どもの成長ぶりを追うことができたり、保育全体をとらえることができる。W保育園のポルトガル語とスペイン語ができるO保育士も保護者がわからないことがあると、「O先生に聞けば大丈夫ね。」と保護者から信頼されており、園の運営が円滑に行われることにもつながっている。通訳が常駐しない太田市のY保育園では、父母に日本語が通じなかったために、子どもがいじめられている、差別されていると誤解された経験があった。通訳がいない浜松市のZ保育園でも、D．V．にあっている親へのケアが充分できなかったり、保育園から保護者に伝えたいことが細かいことまできちんと伝えられない悩みを持っていた。

通訳の待遇面では臨時職員などで満足のいく状態ではないことがわかった。名古屋市のX保育園の通訳は、週20時間という限定された勤務時間であるためはっきりと待遇面での改善を希望していた。このような状況にある通訳であるが、通訳としての仕事に関しては待遇面で改善を求めているX保育園の通訳でも、「子どもの成長ぶりがわかって素晴らしい仕事」ととらえているし、他の通訳も子どもと関わることや通訳をすることにより、人間関係が円滑に進むことにやりがいを感じているし（U保育園、H保育園、D保育園の通訳）、また「自分が成長した」（P保育園）という意見もあった。

通訳がしている保育における工夫は、絵本の翻訳の他に、ブラジルの手遊び

を保育に取りいれたり（P保育園，Q保育園）、日本の手遊びの中にポルトガル語を取り入れたり（H保育園）、ハンカチ落としをブラジルの歌を歌いながらしたり（H保育園）、ミニハウスに園児の国の言葉で保育園の名前を書いたりしている園（U保育園）もあった。

通訳をしていて困ったことは、仕事の忙しさや、日本語の能力不足等が挙げられた。来日してまだ比較的日が浅い通訳は、自身の日本語能力の不足を感じているし、相当する語彙がなくて困るばあいもある。さらに、保育士との関わりのむずかしさを挙げた通訳もいた。子ども達は担任と通訳の役割が把握できていないと言葉の面で親しみやすい通訳になじみがちなので担任の保育士との関係で悩むようである。四日市市のP保育園とQ保育園のように通訳が相互に会合を通じて顔見知りであったり、豊田市のD保育園や東浦町のH保育園のように複数の通訳が勤務している保育園では技術的なことや、保育士や子ども、保護者などとの人間関係の悩みごとをお互いに相談する機会もあると思われるが、１か園の保育所に通訳が一人だけ配置されると悩みごとの相談の機会を作ることもむずかしくなるので、できるだけ横の連格のためのネットワークづくりが望まれる。

相互の連絡に関しては、四日市市のP保育園とQ保育園では、外国人の園児の保育についての会合を定期的に開き、教材の工夫、外国籍園児の保育活動報告書を作製するなど成果を挙げている。また浜松市、八尾市、太田市の保育園における調査から、浜松市では通訳や翻訳に関して市からの積極的な援助は行われていないが、ＣＮＳという多文化共生ネットワークが存在し、通訳や翻訳の援助もＣＮＳに頼んでいた。八尾市では、市が多文化共生に積極的で、ＹＨ保育所の園長の話でも、「以前は保育所内では日本語をと考えていたけれども、多文化共生の講習を受けたことにより考えが変わり、現在では保育所内で母国語を自由に話している。」ということで、多文化共生保育を進めていく際に講習会等を設け、園長を含む保育士に対する教育も大切である。また八尾市には、幼稚園・保育園・小学校・学童の連絡会である多文化共生キッズ交流会もある。太田市は、早くから日系ブラジル人が多く住んでいる市であるが、Ｙ保育園における調査では、市からの援助は依頼した時に通訳が派遣されるという行政と

しては不十分なものであった。このように、それぞれの地域ではネットワークづくりが始められている所もあるがしかし全国的な規模でみてみると、通訳が配置されている保育園は、まだ数が少ないので通訳同士の連絡機関の設置が望まれる。

川崎市のU保育園も多文化共生保育に積極的に取り組んでいる保育園である。この園の保育の様子が日本映画学校（川崎市）の卒業生により、ドキュメンタリー映画「ヘンニムの輝き」として2002年に製作された（ヘンニムとは韓国語で「太陽」の意味)。年長組であるヘンニム組には11名の園児がいるが、その構成は在日韓国人、日系ペルー人、日系ボリビア人、日本人、台湾人と国籍は様々である。「U保育園ヘンニム組には11人の子どもがいた。そしてそこには、５つの違う文化とその分のすばらしさがあった。子ども達は本名を名乗り、保育の中で自分のルーツを教えられていく。そして友達の持つ自分とは違う文化に触れていく。」、「ボリビアは今、朝でしょ。反対なんだよ。りうたちが夜になるとボリビアは朝だよ。」、「子ども達は小さな旅の中でたくさんのものに出会い、どんどん成長していく。その喜びの一方で保育士や保護者には複雑な思いがあった。」、「多文化共生っていうのはそんな生易しいもんじゃない。悪いけど日本社会はもっと根が深いよ。」と、副園長への面接の際にもまず、園児の親の生活の厳しさや園児の医療問題などについての苦悩を訴えておられたが、民族の問題に前向きに取り組んでいるU保育園の様子がよく伝わってくる映画である。私は、訪問した際にこの映画のビデオ版を見せてもらったが、U保育園が保護者や園児の多くの問題を抱えながらも、多文化共生に積極的に取り組み、そのことを映画化するという発想に感激した。

Ⅳ　まとめ

2004年１月から2005年７月にかけて、外国人が多い保育園の中で通訳が常駐している　６か園の保育園（川崎市１園、知多郡東浦町１園、四日市市２園、名古屋市１園、豊田市１園）を選び、通訳及び園長に面接調査を行い、通訳がいることの意義について考察した。また、川崎市、横浜市、太田市、浜松市、八尾市の外国人が多い保育園の園長にも面接調査を行い、多文化共生保育のあ

り方について考察した。その結果をまとめると以下のようである。

1）通訳は、１園では副担任としてクラスを担当していたが、他の５園ではクラスを担当していなくて通訳と翻訳の仕事に専念していた。他に横浜市でポルトガル語とスペイン語ができる保育士を正規の職員として雇用している保育園があった。

2）通訳は、臨時職員や嘱託であったが、勤務時間はほとんどの園で正規の職員と同じ時間であった。

3）通訳が常駐することにより、保育園としても外国籍園児の思いや訴えがわかるようになったり、保護者からも信頼されたりする。また、通訳自身も保育全体の流れをつかむことができる。

4）通訳が派遣される場合には、「相手の気持ちがわからない。」、「保育の流れがつかめない。」、「保護者の信頼を得ることがむずかしい。」などの悩みを通訳がもったりする。

5）通訳がいない保育園では「子どもがいじめられている、差別されている。」といった誤解を保護者から受けたり、問題のある親へのケアができないという経験があった。

6）通訳は自分の仕事について「子どもの成長振りがわかってすばらしいしごと。」、「やりがいを感じている。」、「自分が成長した。」など積極的に評価していた。

7）通訳がしている保育における工夫は、絵本の翻訳、手遊びやハンカチ落としに母国語を取り入れる等であった。

8）通訳をしていて困ったことは、保育士との関わりのむずかしさや仕事の忙しさなどが挙げられた。

9）四日市市では通訳のいる２か園の保育園が、外国籍の園児の保育について定期的に会合を持ち、互いに協力し合っており、八尾市では行政が多文化共生保育に積極的になっているなど地域では、多文化共生保育に取り組んでいる例があった。

10）特徴のある園では、多文化共生保育をテーマに映画制作をしたり、外国籍の園児が多い私立の保育園で通訳を５名雇用している保育園があった。

11）通訳が配置されている保育園はまだ数が少なく、通訳同士のネットワークもまだ作られていないので、通訳を必要としている園への早急な通訳の配置と、相互のネットワーク作りが望まれる。

最後に本稿をまとめるにあたり、いろいろお世話になりました保育園の職員の方々に心からお礼を申し上げます。

文献

1）中川美子「外国人の子どもの保育 ―愛知県のX保育園の観察を中心として－」『愛知県立大学社会福祉研究』第1巻第2号pp. 27－50. 2000.

2）中川美子「外国人の子どもの保育に関する調査―東海地方におけるブラジル人の多い保育園を中心として－」『愛知県立大学文学部論集52号pp. 45－81. 2003.

Y. Nakagawa

Research Regarding Childcare for Foreign Children

翻訳絵本一覧

P保育園

	絵本名	出版社		絵本名	出版社
1	きゅっ　きゅっ　きゅっ	福音館	21	ちいさな　たまねぎさん	金の星社
2	くつ　くつ　あるけ	福音館	22	ノンタンのズホン	借成社
3	おつきさま　こんばんは	福音館	23	かくしたのだあれ	文化出版局
4	おててが　でたよ	福音館	24	はじめまして　カジパンちやん	借成社
5	ノンタン　サンタクロースだよ	借成社	25	はじめてのおつかい	福音館
6	しろくまちゃんのホットケーキ	こぐま社	26	ぽちぽち　いこか	借成社
7	タンタンのハンカチ	借成社	27	ぐりとぐらのかいすいよく	福音館
8	まいごになったぞう	借成社	28	14ひきのあさごはん	童心社
9	ノンタン　およぐのだいすき	借成社	29	めっきら　もっきら　どおーんどん	福音館
10	ぞうくんのさんぽ	福音館	30	もりたろうさんのじどうしゃ	
11	しゅっぱつ　つしんこう	福音館	31	ぷたのたね	絵本館
12	ブルトーザとなかまたち	福音館	32	ちいさなねこ	福音館
13	はんしろうがわらった	グランまま社	33	はっぱのおうち	福音館
14	スイミー	好学社	34	のろまなローラー	福音館
15	ノンタン　たんじようび	借成社	35	はらべこあおむし	借成社
16	おでかけまえに	福音館	36	うずらちゃんのかくれんぼ	福音館
17	11ぴきのねこ	こぐま社	37	そらまめくんとめだかのこ	福音館
18	バムとケロのおかいもの	文渓社			
19	かばんうりのガラゴ	文渓社			
20	さつまのおいも	童心社			

資料　1

「おまえの頭は地球なんだよ」
ヘンニムの輝き
ここに戦争はありません
ここに差別はありません
世界の人が手をつなぐひみつがここにあるのです
第7回釜山国際映画祭正式出品　第19回ＬＡフィルム＆ビデオフェスティバル出品　韓国国営テレビＫＢＳ放送
Az Contest2002ノミネート　第1回横浜学生映画祭特別招待
監督 朴裕燦　撮影 谷崎俊英　制作・写真 永野絵理世　音楽 佐藤啓子　録音 [illegible]
協力　社会福祉法人青丘社 川崎教会 川崎市ふれあい館 横浜とじょう すぎのこ保育園 神奈川県国際交流協会 日本映画学校
製作 桜本保育園　K&J Documentary
2002年/DV/76分/カラー/日本

資料　2